

## 大平正芳という政治家

伊東正義

私が農林省に奉職したばかりの昭和十一年の四月、大蔵省との野球の対抗試合があった。中学と高校を野球部で過ごした私は、ピッチャーとして試合に参加した。大蔵省のチームには、同じくその年に大蔵省に入省したばかりの大平さんがいた。彼は、大きな体でボールを止めるだけのキャッチャーで、野球はつまりとは言えなかった。ピッチャーの私の働きもあって、結果は、農林省チームの大勝だったと思う。試合が終わってから、みんなで銀座へ飲みに行ったが、その場で私と彼とはただちに意気投合した。それが彼とのつきあいはじまりだった。

それから四十数年、昭和五十五年に大平さんが亡くなるまで、大平さんは私にとって、つねにやさしい兄であり、親しい友であり、厳しい師であった。その死からさらに十数年後のいま、私も永い政治生活に終止符を打つことになった。人生の最後の薄明のなかで過去を振り返るとき、私は、自分がいかにこの人生の導師の身をもつての教えに強く影響されてきたか、改めて強く感ぜざるをえない。ここに機会を得て、大平さんの人生の足跡を偲ぶことは、私自身の生涯の総決算にもつながるものである。

### 「お父ちゃん」とあだ名された秘密

大平さんは若いころから、あまり自分から積極的に発言するほうでも、いわゆる親分肌の人でもなかつ

だが、いつのまにか仲間の指導的人物になってしまふところがあった。それは、一つには、彼が大学に入る前に苦学生時代を経てきており、そのため、同じ年次に役所に入った者よりは数歳年長だったことにもよるだろう。だが、おそらくそれより大きな理由は、彼が高松高商時代にキリスト教のあるグループに入って街頭伝道をやったという精神的な遍歴を経験しており、さほどの苦勞をせずに大学を出て役所に入った連中よりも、はるかに深い人生觀を持っていたことにあるだろう。

大平さんは、他人の言うことをよく聞く人だった。おしゃべりでみんなからうるさがられるような人の話にも、実によく耳を傾けた。その忍耐強さはまさに驚嘆に値した。後年、彼は「他人から理解され、その存在を認められる」ということは、人間にとって何よりの生き甲斐だ」とよく言ったが、彼が若いころから、「お父ちゃん」とあだ名され、自ずと人びとの中心にいるようになった秘密は、そうした彼の哲学の実践に裏づけられていたものかもしれない。

大平さんと私が役所勤めをはじめて間もなく、日本が占領した中国の行政管理を目的とする興亜院という役所が設立され、大平さんはその蒙疆連絡部（張家口）に、私は上海連絡部に向向することとなった。北京には華北連絡部があつて、そこには満鉄から佐々木義武武さん（のちに通産大臣）が、通信者から大来佐武郎さん（のちに外務大臣）がきていた。私たちはこの北京の事務所によく集まって、大陸経営について侃々諤々の議論をしたものだが、大平さんは、年長者が混じるなかにあつても、やはり必ず座の中心人物になっていた。このころの彼は、人の言うこともよく聞いたが、自分からも積極的に話すようになっていたように思う。

いまから考えると、この興亜院時代に私たちは当時の日本の植民地行政の片棒を担いだことになるわけだが、若いにもかかわらず大きな任務を任されたこの時期の経験が、のちの政治家としての仕事に大きく役立ったことはまちがいない。大平さんが現地の軍部の独善的なやり方や、実情を知らない東京の役人の

統制的な考え方を、大胆に批判していた口調が、いまでもハッキリと私の脳裏に残っている。

### 市場経済主義を唱える「小さな政府」論者

戦争が終わって私は上海から引き揚げたが、空襲で焼けた東京に住む家がない。仕方がないので、焼け残った大平さんの家の一隅に、家内ともども丸二年間、仮住まいをさせてもらい、この時期に大平さんととくに親しくなった。その家には、大蔵事務次官をしていた池田勇人さん（のちに総理大臣）が微醺を帯びて姿を表し、みんなで酒盛りになることもしばしばだった。そういうとき、大平さんは、農林省肥料課長をしていた私に向かつて、「統制なんてバカなことをやっているから、肥料も食糧も増産できないんだ。民間の市場原理に任せておけばうまくいくのに」と盛んに息巻いていたものである。そのころから彼は、市場経済主義を唱える「小さな政府」論者だったのだ。

民間の知恵と活力に信頼するという大平さんのこの考え方は、その後の彼の生涯を貫く信念となった。第一次石油危機後の大蔵大臣時代に公共料金の改定が、また、第二次石油危機の総理大臣時代に石油価格の改定が問題になった際にも、大平さんは、政府が無理な介入を行えば、あとになって必ず大きなツケが回ってくると、価格メカニズムを無視することに反対した。そして、その結果、彼の主張が正しかったことが証明された。

あの茫洋とした風貌からはなかなか窺い知ることができないが、大平さんは、大蔵省や経済安定本部の公共事業課長という経験を踏まえてか、実に洞察力と実行力にすぐれた政治家だった。その才能は、まず郷土において存分に発揮された。私は、農林省の農地局長をしていたとき、すでに代議士になっていた大平さんから言われて、四国の吉野川の分水問題、いわゆる香川用水開発に取り組んだことがあるが、その際の大平さんの采配ぶりは実に見事だった。それまでの香川県は、夏には雨が少なく、水争いで血の雨が

降ることが絶えないところだった。この用水は、そういう香川県に徳島県と高知県から水を引こうというものだった。しかし、水を他県からもらってくるというのは、きわめて困難なことでされている。そうしたなかでこれが実現できたのは、ひとえに、当時まだ代議士になって間もない大平さんの政治力によるものだった。いまこの用水が香川県の農業のみならず、産業や住民の生活に果たしている役割は測り知れないほど大きい。

私は、昭和三十八年農林省を退官し、同年十一月に衆議院議員に初当選した。そのころには、大平さんはずでに内閣の大番頭たる官房長官を経て、外務大臣となっており、前途は洋々と見られていた。しかし、大平さんは、その後、間もなく外務大臣をやめ、ついで長男の死という不幸に見舞われた。しかも、池田さんを後継した佐藤栄作さんは、どういうわけか大平さんを疎んじ、佐藤政権の七年八か月は大平さんにとって長い「冬の時代」となった。私も、昭和四十二年一月の二回目の選挙で落選して、その約三年後の昭和四十四年十二月の選挙で再度当選するまで、浪々の身を嘆くこととなった。この間に大平さんが、私に払ってくれた万全の配慮を忘れることができない。

### 宏池会会長交代劇の過程で大成

歴史の本を繰ってみると、鬱屈した長い不遇の時代を送ったあと、すぐれたトップとなった人物がいたことがわかる。世界に知られた人物の名を上げれば、ドゴールがそうだったし、チャーチルもそうだった。日本では大隈重信、岸信介などがそうである。彼らは、その時代に自分を鍛え、新しい任務に耐える人間に生まれ変わる努力をしたのだらう。

私は、大平さんもまた、そういう人物の一人ではなかったかと考える。そして、彼がその「冬の時代」の最後に遭遇した試練は、宏池会の会長交代というむずかしい問題だった。自民党の派閥の発生は、基本

的には一人の政治家を党の総裁にするため、その人物をめぐって、政見や志向を同じくするものが集まる  
ところからはじまった。そして、その中心となった政治家が何らかの理由で政界を去ると、派閥は解体し  
て、メンバーは別の派閥に吸収されるか、独自の派閥を形成するかするのがつねだった。ところが、宏池  
会だけは、池田さんが亡くなったあと、その盟友だった前尾三郎さんが領袖の座を受け継いだ。派閥は  
そのまま維持されたが、派閥の領袖は総裁選挙に立候補して、メンバーの期待に応えなければならぬ。  
にもかかわらず、前尾さんは、佐藤政権時代の四回目の総裁選挙で、佐藤さんと話し合い、入閣を条件と  
して立候補を辞退した。ところが、佐藤さんが選挙後の内閣改造を見送ったため、その約束は反古にされ  
たかたちとなった。

かねてから前尾さんが政権意欲の弱いことに不満を抱いていた若手グループ（田中六助、佐々木義武、  
田沢吉郎、服部安司、浦野幸男、伊東正義など）は、これを聞いて猛烈に反発し、大平さんを推して、会  
長交代を求めるというクーデターまがいの挙に出るにいたった。自民党の派閥としては、かつてなかった  
ことである。

このときの大平さんの心中は、察するに余りある。彼の頭には、いつまでも前尾さんの下で部屋住みの  
身であるのではなく、宏池会会長としてポスト佐藤の総裁選挙に打って出て、田中角栄、福田赴夫、三木  
武夫、あるいは中曽根康弘などのライバルと総裁選を争いたいという考えが去来したことだろう。しか  
し、前尾さんは大蔵省での先輩であり、政界に出てからは、二人は池田さんのもとで兄と弟の関係で働い  
てきた。それを力づくで会長の座を奪い取るなど、およそ人の道に反することではないか。大平さんの苦  
渋は深かったが、あれこれ彼が呻吟しているうちに、若手造反グループの運動は次第にエスカレートし  
て、分裂をも辞さずという空気になってきた。当時、私は二年生議員だったが、大平さんに決意を促すた  
め、何度も彼の瀬田の自宅に通ったことを覚えている。そして、ある日、彼は「みんながそれほど言っ

らば……」と、その態度を決定した。

結局、昭和四十六年春、前尾さんから大平さんへの会長交代は話し合いで何とか決着したが、私は、大平さんはこの会長交代劇の過程で、権力を手に入れるためには、必要とあれば義理や人情を振り捨てることもやむをえない、という政治家の宿命を受け入れる真の決意をしたのだと思う。これ以後、大平さんは、派閥の領袖として総理・総裁をめざすことになるが、その目的を達するまでにはなお七年半の苦難の道を歩まなければならなかった。そして、ついに権力の座に到達したときには、さらに過酷な運命が彼を待っていた。

### 「責任倫理」と「心情倫理」の間で

だが、大平さんはずでにこのときには、かつてよりはるかに力強く大きな政治家になっていた。彼は、かりに悪魔と手を結んでも結果に対する責任を果たすという、マックス・ウェーバーのいわゆる「責任倫理」を身につけていたにちがいない。そうした自己変革がなかったら、彼は、その後の日中国交回復やロッキード事件、さらには「四十日抗争」など重大な政治的決断を要する局面で、自らに課された役割を果たせなかったことだろう。大平さんは、国家の目的と自分の使命をしっかりと見据えつつ、いかなる誹謗や中傷にも、また、いかなる恫喝や脅迫にもたじろぐことなく、淡々と事を進めていった。彼と親しかった私も、その立派な態度に頭の下がる思いがしたものである。

とはいえ、大平さんが内心の苦しみをまったく捨て去っていたと言え、それは言い過ぎと言つべきだろう。とりわけ大平さんは、若いころキリスト教に親しんだことがあり、晩年になっても聖書を身辺から離さない人柄で、「正しく行為して、その結果は、神の裁量に任せる」という宗教者の「心情倫理」に強く心を引かれていたにちがいない。彼はその内心の矛盾をおもてに表すことがなかったが、大平さんのふ

とした素振りや独り言から、その内心を窺うことができた。彼をよく知る人びとにとつて、それは言うに言えない一つの魅力でもあったのだ。

私は、大平さんが「自分は総理をやめたら、政界を引退する。郷里の若い青年を育てながら晩年を送るんだ」と言うのを聞いたことがある。ダブル選挙のさなかの急逝によつて、大平さんはその最後の意志を遂げることができず、私たちも、彼の真意を聞くことができなくなった。だが、私には、それが人間大平の心情の吐露だったように思えてならない。

ヴェーバーはこう書っている。「結果に対する責任を本当に深く感じ、責任倫理に従つて行動している成熟した人間が……ある一点で、『私はこうするほかはない。ゆえに私はここに立つ』と言うならば、それは測り知れぬ感動を与える。それは人間的に純粹なもの、魂を揺り動かすものである。なぜなら、内面（の世界）が死んでいないかぎり、われわれはいつかはこういう状態に立ちいたらざるをえないからである」。

（第二次大平内閣官房長官）